

を憶えて居ります。先生は沖縄の「琉風の碑」に見られるような立派な句を作られる方でした。

何かのことで先生にお会いした時、在任中大変だったことは何でしたか、とお聞きしたら、「それはチリー地震津波の時でしたね。あの時は辞表をふところに大臣の説明に行きましたよ。」と云われて、あとは口をつぐんでしまわれました。それ以上云うと誰かが迷惑すると思われたからでしょうか。先生はそういう方だったように思います。

晩年になってから、お願いして大野義輝さん幹事の先生のお宅での集まりに出席させて戴きました。主と

して理子さんが食事等のお世話をして下さいましたが、その時々に興味ある話が出て、楽しい集まりでした。その頃は先生は写真の整理等もして居られたようでした。

何度か私的なこともお願いしたことがありますが、「よし、わしにまかせとけ」と云うようなことは申されませんでした。必ずしばらくしてから朗報を届けて下さいました。先生はそういう誠実な方でした。

先生の人となりは、清濁合せ飲む、スケールの大きい、大局を間違いなく掴む方だったと思います。昔風に云えば、君子の手本でございました。

先生と鳥島気象観測所と私

池 田 芳 三

昭和21年1月に連合国総司令部最高司令官 AG 00093 GC を以て鳥島における気象観測を指令され、同年2月中央气象台鳥島臨時出張所が設置された。事務は総務部企画課（大和順一氏）で行なわれ、当時総務部長の先生が事務取扱いを兼任なされた。

同年2月指令実施のため備船 LST 030 で所要の人員28名が器材と共に東京港を出港、鳥島現地で上陸に際し上陸用舟艇が岩礁に乗り上げ運航不能となり、23名は一応上陸したが他に小舟を持たない LST は八丈島に引返し小舟を入手再び鳥島に到着、陸上の不利な状況で心身共に疲労した上陸員23名を収容し、開設を断念して3月9日引揚帰京した。

同年7月に観測船凌風丸で鳥島調査団22名が測候所建設に関し詳細な調査を行い8月に帰京した。

同年11月中央气象台に離島事務室が設置されその主事に先生がなられ副主事に大和順一氏がなり鳥島測候所創設業務が始められる。（長野測候所より出向の宮崎本弘技官この事務に当る）

私は昭和22年2月中央气象台離島事務室勤務を命ぜられ長野測より上京し先生の元で宮崎技官と共に創設の準備事務をし、同年4月鳥島臨時出張所創設事務に従事すべしの命を受け、5月15日守屋淳所長以下47名（観測員、工事人、作業員）が凌風丸に資材積載し東京港を出港21日鳥島に着くも天候不良で資材揚陸は難行の極みであった（後で判明したことであるが内地より約1か月早い梅雨期であったのである）。雲は低くたれ

雨の日多く陸上の設備作業も大変な労苦であったが、

同年6月1日観測業務、26日には通信業務を開始する事が出来た。この時先生から祝福と激励の電報が届いた。

昭和23年5月私は鳥島勤務中急に身体不調となり背部全体に激痛を起し身動き出来なく言語もままならず、無線通信連絡（トンツー、トンツー）、本台無線現業には急を知り先生が来ておられ、病状を聞き直接に指示された。その結果鳥島近海航行の内地向船 STQO 95 に救援を受け帰還。横浜の中央病院に入院急性湿性肋膜炎に胆のう炎併発と診断治療し事なきを得40日で元気になり復帰し先生のところに挨拶に行くと「良かったネお大事に」と温い言葉を頂いた。

昭和31年4月月夜山山頂ドームを設置し遠隔高層観測実施の運びとなり、7月には新庁舎及待機所完成、高層観測施設の落成式及鳥島気象観測所視察に先生他関係官と八丈島から神官が来島行事が行われた。

先生は所員と共に数日を過されて、劣悪な無人島でこんなもてなしを受けてとことのほか満足をされたことを耳にした。

そして31年のこの年中央气象台は気象庁に昇格し第6代台長の先生は初代の気象庁長官となられ、昭和38年退官された。

昭和40年11月鳥島は震度4の地震に続いて有感地震、火山性微動が頻発し火山活動が憂慮され鳥島の観測業務中止全員帰還した。この後備船により鳥島附近

洋上観測がなされて昭和42年6月離島課を解散した。

思えば昭和22年開設し42年廃止と測候所としては短い寿命であった。

同年9月に気象庁鳥島クラブ「鳥島」編集委員会発刊“鳥島”と伝う島の記録写真と特記文を合せかわった人達の記念の書(127頁)を出版した。この書に身に余る序文を先生にしたためて頂いた。先生自ら開設、

そして引揚まで先生は何時も劣悪な条件の鳥島勤務員のことを思い心痛めておられたことと思う。廃止で一番ホッとされたのは先生ではなかったかと、当時を思い、気象記念日、旧友の集いで先生の温和で心温まる姿にお逢いすることが出来ないことの淋しさを身にかけて……………合掌

和達さんと天気相談所

伊 坂 達 孝

昭和21年の2月初め、私は和達清夫予報部長から、すぐ来るよう連絡を受けた。敗戦から半年しか経過していない時期で、社会の混乱は未だ収拾の方向さえ見えていなかった。

当時、予報当番のサブが私の仕事で、予報課に属していたが、課長からでなく部長の呼び出しに、訝しさと軽い緊張があった。

和達部長は、これらかの時代は、気象台でも一般市民に直接サービスをする窓口を作ったと考えますが、君の意見はどうですか、といった趣旨の発言をされた。

なぜ、大勢の予報課員の中から私が呼ばれ、意見を求められたのか、確かな事情は判らない。恐らく予報当番の折りに、久米庸孝氏と、これからの民主的な社会と気象事業のサービスの在り方について、雑談したりしたことが一つのきっかけだったのかも知れない。

私は和達部長の発想には一も二もなく賛成であった。予報部の男子職員2名、女子職員1名を配置してくれることになり、私を含めての4人は、早速その準備に取りかかった。

予算はゼロ。場所は旧図書館の1階の一隅を使うことになった。この窓口のネーミングは、部長の発案で天気相談所に決まった。

椅子に座って双方が対話の出来る、ベニヤ張りの木製のカウンターも速成で造られた。書棚や衝立で仕切って、ともかくも15坪程の急造の相談所が開設されたのは、月末の25日であった。

その間、和達部長は時々顔を出され、いろいろと助言などされた。開所後もふらりと寄られては、思いつかれたアイデアを、どうかねえと示されたり、一晚

考えた「お天気いろはカルタ」を持参されたりした。

その頃、戦後の混乱のため鉄道便で送った荷物が届かなかったり、間違った場所に送られたりすることが多く、市民からの問い合わせが国鉄に殺到していた。

そこで、秋葉原駅に小荷物迷い子相談所という窓口が出来て、その便利さが好評だった。役所の相談所第1号でもあるが、天気相談所は実にこの種のものでは2番目になる。

この天気相談所開設に係わり、話し合いの機会を多く持ったことで、それ以来、「気鋭の地震学者和達博士」は、私にとって、柔軟な考え方をされる、幅の広い、江戸人の気風も少し残された、多趣味の教養人として、「和達さん」と申し上げたほうが相応しい存在になっていった。

私のドイツ語の恩師、和田顕太郎先生が、学生時代からの和達さんの生涯の親しい友人だったので、先生を通じて知った和達像も、一層の親しみを感じさせたのだろうと思う。

和達さんが未だお若かった頃、お宅には明治、大正の著名な文人、文化人などが絶えず出入りしていたという。そんな文化的雰囲気の家環境の中で、和達さんは日常の生活の中で、こういった人々と接する機会も多かったようである。

洋画の手ほどきを受けられたのも、あの異色の画家、牧野虎雄からだったというから、「和達サロン」とも呼ばれていた、その頃のご家庭の環境が想像される。また、高浜虚子の仲のよいライバルで、その作風などいつも対比される、俳人河東碧梧桐を交え、家人や友人達と句会をともにもされたという。

和達さんが泉鏡花について話される時も、「泉さん」